

研究課題	伝統的信仰登山・巡礼に学ぶ自然歩道の持続可能な維持管理システムの構築
研究代表者	古田 尚也 (地域構想研究所 任期制教授)

1. 研究目的

近年、わが国でも米国等の事例にならったトレイル（自然歩道）の整備が各地で進められているが、維持管理の面で様々な課題を抱えている。本研究では、①こうした国内のトレイル事例の課題を再整理した上で、②四国八十八箇所巡りや熊野三山参詣のような、わが国で古くから継続してきた宗教や信仰上の聖地を巡礼する伝統的なトレイルにおいて、どのように「維持管理システムの持続可能性のメカニズム」が担保されてきたのかを明らかにし、③それらの知見をもとに、トレイルの持続可能な維持管理システムを構築する上で必要な方策を検討し、④得られた知見を、自然資源の持続可能な利用における文化・宗教的価値の役割をめぐり近年活発化している国際的な研究や議論にも反映させることを目的として実施した。

2. 研究方法

本研究は、以下に示す4つの課題（サブテーマ）から構成される。

- A. 国内各地で整備が進められているトレイルの課題についてヒアリング等を元に再整理する。
- B. わが国の宗教・文化的を基盤とする巡礼の事例について、関係者へのヒアリング調査や学際的な観点からの現地調査により、その「維持管理システムの持続可能性のメカニズム」を明らかにする。また、これらの知見を国際的議論に反映させるために海外調査も実施する。
- C. 調査結果の分析やワークショップ等により、必要な方策を検討する。
- D. 海外の専門家と連携し、英文での事例の寄稿や投稿を通じ、国際的な議論に成果を反映させる。

表1 サブテーマの担当者と実施年度

サブテーマ	担当者(役割)	H29	H30	H31
A:トレイルの持続可能な維持管理システム構築上の課題整理	・古田(総括/政策分析) ・八巻(ガバナンス分析) ・柴崎(経済分析)	←→		
B:伝統的巡礼における、「維持管理システムの持続可能性」のメカニズムの解明	・古田(総括/政策分析) ・八巻(ガバナンス分析) ・寺田(宗教・社会分析) ・臼木(意識・コミュニティ分析) ・柴崎(経済分析)	←→	←→	
国内事例 海外事例				
C:持続可能な維持管理システムを構築する上で必要な方策			▲	▲
D:国際的な研究や議論への貢献	国際連携の窓口は古田と研究協力者のVerschuuren(ワグeningen大)			←→
			ワークショップの開催	
			IUCN WCPA CSVPAとの連携による新しいベストプラクティスガイドラインなどへの成果の反映	

各課題の担当者と研究フローは表1の通りである。この研究組織により、トレイル（自然歩道）の持続可能な維持管理システムの構築のために、環境政策、環境ガバナンス、宗教学、社会学、

哲学、コミュニティー論、経済学／民俗学といった幅広い分野から多面的なアプローチを行うことを狙いとし、平成 29 年度から 3 ヶ年の計画で実施する予定とした。

3. 研究成果と公表

本研究助成事業の第 1 年次である平成 29 年度においては、三大修験の山で、かつ環境省の長距離歩道が以前より設定されている吉野・大峰山、出羽三山、英彦山、さらに地元自治体によるトレイル整備が最近行われた比叡山、国東半島の現地調査を実施したほか、地域住民によって旧道の復活や維持管理を行っている徳島県阿南市の四国八十八箇所遍路についても現地調査を行った。そのほか、環境省担当者等を招いた研究会を大正大学で 3 回開催した。これら現地調査の結果の一部については、すでに単行本や雑誌を通じて発信する（古田 2018, 2017a,b,c,d）など着実に成果を見える形で公表した。また、これらの成果では、現地調査を実施した特定の事例に関する報告だけでなく、国内外のロングトレイルと宗教や信仰に基づく巡礼の路に関するレビューを行い、その概念整理も行った（古田 2017a）。



図 共通土俵としてのロングトレイルの概念（古田 2017a より再掲）

さらに、本研究テーマを発展させた研究計画「ペーパートレイル：高齢化、健康志向時代における自然歩道システムの役割とその再構築」を作成し、科学技術振興財団に提出したところ、平成 30 年度科学研究費基盤研究（C）にて採択されるという成果を生んだ。この研究計画書を作成するに当たっては、平成 29 年度の研究成果をもとにして、以下のような課題設定を行った。

すなわち、わが国では、高齢化や健康志向を背景としてウォーキングやトレイルラン等の自然歩道（トレイル）を利用したアクティビティへのニーズが 1990 年代ごろから増加してきた。百名山に代表される山岳登山については、登山口までの公共交通や自家用車によるアクセス、登山道や山小屋等のインフラ、さらに各種のガイドブックやツアー、地図、ガイドと

いったソフト面のインフラや情報提供システムが比較的整っており、入門者から上級者まで様々な層が楽しむことができる幅広いサービス提供の仕組みが出来上がっている。一方で、里地・里山を中心とした歩くことを楽しむ自然歩道（トレイル）についても、環境省の「長距離自然歩道」や「信越トレイル」に代表されるボトムアップ型のロングトレイルなど、近年、全国各地で様々なタイプのトレイルの整備が進んでいる。今後とも、高齢社会の進展とともに、本格的な登山は体力的に厳しいが、健康のために里山や里地を中心に手軽に歩けるトレイルに対するニーズの増加が予測される。実際、体力・スポーツに関する世論調査（平成 25 年）では、今後行ってみたい運動・スポーツとして「ウォーキング」を挙げたものの割合が 53.9%と最も高いという結果が得られている。一方で、すでに整備されたトレイルの現状を見ると、トレイルの整備・管理・運営主体がトレイルごとに異なっていることに加え各主体間の調整が十分でなく、統一されたシステムとしてサービスが提供されていない。その結果、ソフト面のインフラや情報提供システムの不足、利用者の減少、ハードの老朽化と維持管理不足という悪循環に陥っているケースが散見される。四国八十八箇所巡りなどの限られた成功事例はあるものの、トレイル同士のシステム化、ネットワーク全体としてのガバナンスに課題があるため、こうした成功例の知見も他事例に十分生かされていない（古田 2017a, b など）。

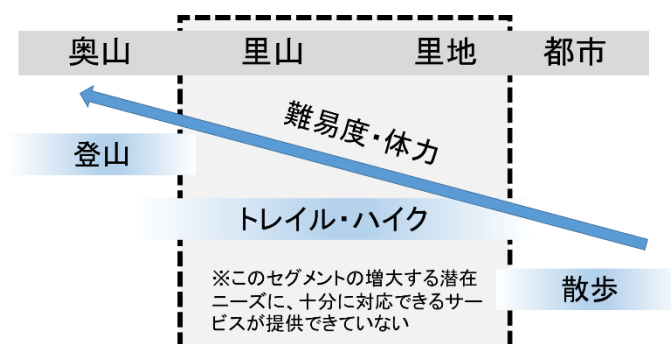


図 「歩く」ことに関する活動のスペクトラムと活動の「場」

法律で指定されたので地図には載っているが、実際には管理運営が不十分で機能していない保護地域を指す概念として「ペーパー・パーク」という言葉がある。国立公園制度が米国から世界各国に広がり、世界の保護地域の面積が拡大する中

で、特に発展途上国で長年大きな問題となってきた。こうした保護地域の管理・運営を含めたガバナンスの問題については、IUCN（国際自然保護連合）や CBD（生物多様性条約）などの国際的な場で継続的に議論されると同時に、学術研究面でも膨大な蓄積がある（古田 2011、古田・山崎 2012 など）。一方で、保護地域の内外に設定されているトレイルについては、その重要性に比してこれまでそれほど国際的な議論の中でも注目されておらず、研究的蓄積もいまだ多くない。これは、トレイルが一般的に問題が起きやすい途上国には少なく、欧米の先進国で発達してきたこと、保護地域問題の影に隠れてきたことなどが要因であると推察される。また、既往研究では、主としてトレイル通行に伴う私有地へのアクセス権やコモンズ論などの法的側面からアプローチが中心である。しかし、前述したような現状の課題や今後のニーズを踏まえると、人々の多様なニーズにあわせたトレイルの整備・管理やネットワーク化、トレイルを通じた地域活性化や環境啓発活動など、課題解決を目指したより実践的な計画論、政策論的アプローチから、わが国の高齢化、健康志向時代におけるトレイルの望ましい姿を検討し、その持続可能なガバナンスのあり方について提言を行うことが喫緊の課題と考えられる。また、こうしたアプローチにより、現在増加している海外からのインバウンド旅行客を里地・里山地域に呼び込むきっかけにもなる上、人口減少により荒廃が進む里山地域の課題解決につながることも期待できる。

以上のように、本研究事業では、1 年目から成果を積極的に対外的発信するとともに、その成果を発展させ、外部研究資金の採択につなげることに成功した。今後は、平成 29 年度の研究成果も生かしつつ、科研費によるあらたな成果を加え、学術的な成果とともに政策により直接反映できるような実際的な成果を生み出すことを目指している。

参考文献

1. 古田尚也「神仏習合の歴史が息づく自然の聖地と巡礼の路―国東半島／英彦山」地域人第30号、p64-69、2018、査読無

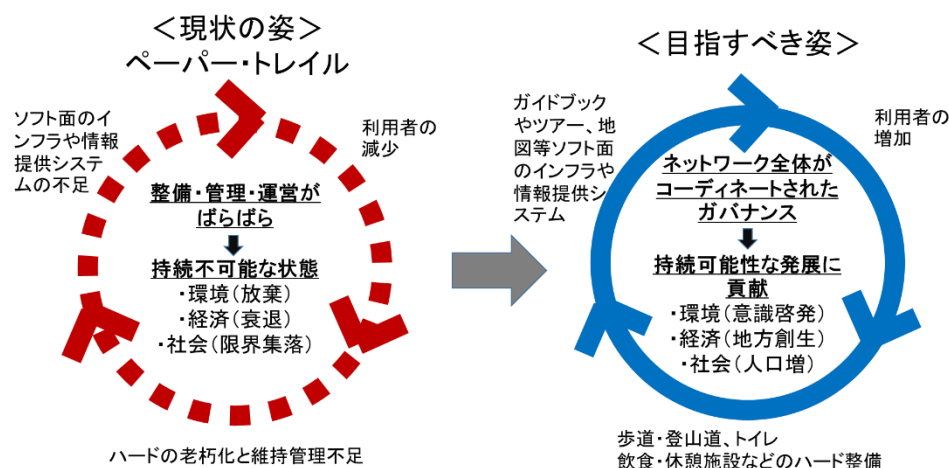


図 わが国の典型的な自然歩道(トレイル)の現状の姿と目指すべき姿

2. 古田尚也^a「ロングトレイルとしての四国八十八箇所巡りの可能性」五十嵐敬喜・岩槻邦男・西村幸夫・松浦晃一郎編著「回遊型巡礼の道－四国遍路を世界遺産に」ブックエンド、p120-133、2017、査読無
3. 古田尚也^b「巡礼の道と自然歩道」バイオシティ No.72、p102-109、2017、査読無
4. 古田尚也^c「自然と信仰が息づく生まれかわりの山－出羽三山」地域人 第26号、p62-67、2017、査読無
5. 古田尚也^d「日本固有の山岳信仰修験道の聖地－大峰山・吉野」地域人 第25号、p66-71、2017、査読無
6. Ono T, T. Hongo, K. Yamamoto and N. Furuta, Mount Fuji's history as a spiritual realm and means for its preservation, 159-170 in Verschure B. and N. Furuta (Eds.), Asian Sacred Natural Sites – Philosophy and practice in protected areas and conservation, 2016, Oxon: New York, Routledge, Xviii, 340頁、査読無
7. 古田尚也、山崎厚子（訳）、自然の聖地－保護地域管理者のためのガイドライン、128頁、生物多様性JAPAN, 2012（Wild, R. and McLead, C. 2008. Sacred Natural Sites Guidelines for Protected Area Managers. Gland: IUCN）、査読無